

Psychiatry and Clinical Neurosciences

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 77 (2) は, PCN Frontier Review が 2 本, Regular Article が 3 本掲載されている。国内の論文は著者による日本語抄録を, 海外の論文は PCN 編集委員会の監修による日本語抄録を紹介する。

PCN Frontier Review

Neurological post-acute sequelae of SARS-CoV-2 infection

M. Takao and M. Ohira*

*Department of Clinical Laboratory and Internal Medicine, National Center of Neurology and Psychiatry (NCNP), National Center Hospital, Tokyo, Japan

SARS-CoV-2 感染後の神経学的後遺症

重症急性呼吸器症候群コロナウイルス 2 型 (SARS-CoV-2) による新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) は, 急性期 (発症後おおむね 4 週間) と慢性期 (発症後 4 週間以上) の 2 つの経過をとりうる。両者とも, 神経症状や精神症状を含むさまざまな徴候や症状を伴う。COVID-19 の後遺症と考えられる徴候や症状は, COVID 後遺症, long COVID-19, SARS-CoV-2 感染後症状 (post-acute sequelae of SARS-CoV-2 infection : PASC) と呼ばれる。PASC の症状には, 疲労, 呼吸困難, 動悸, 嗅覚障害, 微熱, 高血圧, 脱毛症, 睡眠障害, 集中力低下, 健忘, しびれ, 疼痛, 胃腸症状, うつ, および不安が含まれる。PASC の病態はまだ解明されていないため明確な基準はなく, 世界保健機関の定義もおおまかな内容である。そのため, PASC を正しく診断することは困難な状況である。COVID-19 感染後 12 ヶ月までで, 患者の約 50% が少なくとも 1 つの PASC としての症状を示す可能性があるが, PASC の正確な有病率は確定

していない。世界中で PASC に関する多くの研究が進行中であるが, 現段階では PASC の明確な診断方法や治療法は存在しない。この総説では, PASC に関する現在入手可能な情報についてまとめ, 特に COVID-19 感染による神経学的後遺症を中心に解説した。さらに, われわれの外来診療の経験に基づいて, PASC 患者の診断とケアに関する提案を示した。

PCN Frontier Review

Neuropsychiatric aspects of long COVID : A comprehensive review

T. Kubota, N. Kuroda and D. Sone*

*1. Department of Neurology, National Hospital Organization Sendai Medical Center, Sendai, Japan, 2. Department of Neurology, Tohoku University Graduate School of Medicine, Sendai, Japan

Long COVID の神経精神的側面 : 包括的レビュー

COVID-19 感染後に症状が持続する患者や新たな症状を発症する患者がいるが, long COVID の神経精神的側面はあまりわかっていない。このレビューは, long COVID の神経精神的側面を要約しつつ最新の知見を提供する。Long COVID の神経精神症状には, 疲労, 認知機能障害, 睡眠障害, うつ病, 不安症, 心的外傷後ストレス障害などがある。Long COVID に特異的な検査はないが, ポジトロン断層法における代謝低下など, いくつかの特徴的な所見が報告されている。Long COVID の発症メカニズムは, 炎症, 虚血作用, ウイルスの直接浸潤, 社会的・環境の変化などが考えられている。患者背景や COVID-19 急性期感染の重症度・合併症が, 神経精神症状のリスク増加と関連

する可能性がある。Long COVID は寛解することもあれば持続することもあり、神経精神症状の種類で異なる。確立された治療はないが、さまざまな精神・薬物治療が試みられている。Long COVID の予防には、COVID-19 ワクチン接種が重要な役割を担っている。SARS-CoV-2 は omicron 株のように変異するため、今後、long COVID が変化する可能性がある。有効な治療法を開発するため、long COVID のさらなる研究が必要である。

Regular Article

Beyond body image : what body schema and motor imagery can tell us about the way patients with anorexia nervosa experience their body

V. Meregalli*, E. Tenconi, C. R. Madan, E. Somà, P. Meneguzzo, E. Ceccato, S. Zuanon, A. Sala, A. Favaro and E. Collantoni

*1. Department of Neurosciences, University of Padua, Padova, Italy, 2. Padua Neuroscience Center, University of Padua, Padova, Italy

身体イメージを超えて：神経性やせ症患者が自己の身体を認識する方法について身体図式と運動イメージからわかること

【目的】最近のエビデンスから、神経性やせ症患者でよく観察される身体イメージの障害が身体図式にも及ぶことが示唆されている。身体性（エンボディメント）アプローチによると、身体図式は運動遂行に関与するだけでなく、運動イメージ、身体の心的回転、空間的視点の取得など、運動に関する心的シミュレーションしか必要としないタスクにも関与する。本研究の目的は、神経性やせ症患者が運動を心的に模倣する能力を評価することであった。【方法】急性期の神経性やせ症患者 52 名および健常対照 62 名を対象とした。全患者が明示的運動イメージテスト、心的回転テスト、空間的視点取得テストの 3 つのテストを行った。【結果】神経性やせ症患者は対照と比較し、一人称視点により運動をイメージすることが困難であること、運動イメージの正確性の低下、人体像の心的回転に対する選択的障害、およびさまざまな自己中心的な空間的視点を想定する能力の減退を報告した。【結論】これらの結果から、神経性やせ症患者では運動イメージに特定の変化があることが示唆された。興味深いことに、患者の能力の低下は特に身体図式に依存するタスクに限定されているように思われ、三次元の物体についての心的回転タスクでは患者と対照の成績は同様であった。

Regular Article

Endogenous antioxidants predicted outcome and increased after treatment : A benzoate dose-finding, randomized, double-blind, placebo-controlled trial for Alzheimer's disease

H. Y. Lane*, S. H. Wang and C. H. Lin

*1. Department of Psychiatry & Brain Disease Research Center, China Medical University Hospital, Taichung, Taiwan, 2. Graduate Institute of Biomedical Sciences, China Medical University, Taichung, Taiwan, 3. Department of Psychology, College of Medical and Health Sciences, Asia University, Taichung, Taiwan

内因性抗酸化物質は転帰を予測し治療後に増加した：アルツハイマー病に対する安息香酸塩の用量設定、無作為化、二重盲検、プラセボ対照試験

【目的】これまでの複数のパイロット試験から、安息香酸ナトリウムはアルツハイマー病（Alzheimer's disease : AD）患者、統合失調症患者または老年期うつ病患者の向知性薬となりうるということが示唆されている。特に AD 治療については、効果予測バイオマーカーを用いた検証的試験が早急に必要とされる。本試験は、安息香酸塩が AD の新規治療薬となりうることを確認し、その最適な用量およびバイオマーカーを設定することを目的とした。【方法】台湾にある 3 ヶ所の主要な医療施設で 24 週、用量設定、無作為化、二重盲検、プラセボ対照試験を実施し、0, 8, 16, 24 週時に臨床的測定を行った。AD のスクリーニングを受けた患者 154 名のうち 149 名が適格であり、次の 4 つの治療群のいずれか 1 つに無作為に割り付けた。(i) 安息香酸塩 500 群（固定用量 500 mg/日）、(ii) 安息香酸塩 750 群（最初の 4 週は 500 mg/日、5 週目から 750 mg/日）、(iii) 安息香酸塩 1,000 群（最初の 4 週は 500 mg/日、5 週目から 1,000 mg/日）および (iv) プラセボ群。主要評価項目は、AD の認知機能障害を評価する認知機能下位尺度（AD assessment scale-cognitive subscale : ADAS-cog）を用いて測定した。【結果】安息香酸塩 1,000 群は ADAS-cog の改善で最も良好な成績を示し（24 週時 $P=0.026$ ）、女性のほうが有利であった。ベースライン時の血漿中カタラーゼ値が高いほど良好な転帰を予測した。安息香酸塩を投与した群ではプラセボ群と比較し、治療後のカタラーゼおよびグルタチオン値が高い傾向にあった。4 つの介入群の安全性プロファイルは同様であった。【結論】安息香酸ナトリウム療法は、2 つの生体由来の内因性抗酸化物質であるカタラーゼおよびグルタチオンを増加することにより AD 患者の認知機能を改善し、ベースラインのカタラーゼ値が高いほど良好な反応を予測した。本試験の結果は酸化ストレス理論を裏付け、安息香

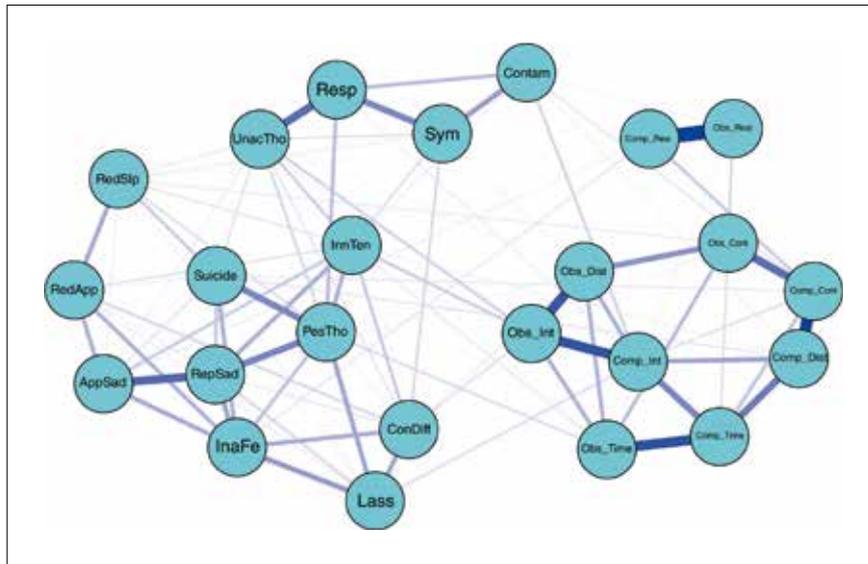


Figure 1 Network of OC and depressive symptoms. AppSad, apparent sadness ; Comp_Cont, degree of control over compulsive behavior ; Comp_Dist, distress associated with compulsive behavior ; Comp_Int, interference due to compulsive behaviors ; Comp_Resi, resistance against compulsions ; Comp_Time, time spent performing compulsive behaviors ; ConDiff, concentration difficulties ; Contam, Concerns about Germs and Contamination ; InaFe, inability to feel ; Lass, lassitude ; Obs_Cont, degree of control over obsessive thoughts ; Obs_Dist, distress associated with obsessive thoughts ; Obs_Int, interference due to obsessive thoughts ; Obs_Resi, resistance against obsessions ; Obs_Time, time occupied by obsessive thoughts ; PesTho, pessimistic thoughts ; RedApp, reduced appetite ; RedSlp, reduced sleep ; RepSad, reported sadness, InnTen, inner tension ; Resp, Concerns about being Responsible for Harm, Injury, or Bad Luck ; Suicide, suicidal thoughts ; Sym, Concerns about Symmetry, Completeness, and the Need for Things to be “Just Right” ; UnacTho, Unacceptable Thoughts.

(出典：同論文， p.113)

酸塩が AD の新規治療薬として有望であることを示すものである。

Regular Article

Core clinical symptoms and suicidal ideation in patients with obsessive-compulsive disorder : A network analysis

S. T. Kim*, J. H. Seo, C. I. Park, H. W. Kim, Y. J. Boo, H. Kim, S. Jeon, J. I. Kang and S. J. Kim

*1. Department of Psychiatry, Yonsei University College of Medicine, Seoul, Republic of Korea, 2. Institute of Behavioral Science in Medicine, Yonsei University College of Medicine, Seoul, Republic of Korea

強迫性障害患者における主要臨床症状および希死念慮：ネットワーク分析

【目的】強迫性障害 (obsessive-compulsive disorder : OCD) における自殺傾向は過小評価されており，臨床医は希死念慮に關与する因子を理解することが重要である。本研究は，OCD の主要臨床症状に關し，強迫観念，強迫行為，強迫観念-強迫行為 (obsessive-compulsive : OC) 症状軸，抑うつ症ならびに心理的特性を含むネットワークを推定し，OCD と一次診断された患者においてどの症状が希死念慮に寄与するかを検討することを目的とした。【方法】OCD 患者合計 444 名について，Yale-Brown 強迫観念・強迫行為尺度，Montgomery-Asberg うつ病評価尺度およびその他のさまざまな尺度を用いて評価した。ネットワーク分析を行い，強迫観念・強迫行為および抑うつ症

状、失感情症や衝動性などの心理的特性、人口統計学的共変量からなるネットワークを推定した。ネットワーク中、希死念慮に直接関係する症状について希死念慮に対する相対寄与度を検討した。【結果】希死念慮は、抑うつ症状および失感情症とともに、強迫行為の制御の程度、強迫行為に伴う苦痛、強迫行為に費やす時間、受け入れ難い思考に直接関係した。OCおよび抑うつ症状のネットワークのうち、OCについての最も主要な症状

は強迫行為による支障および強迫観念による支障であり、抑うつ症状については悲観的な思考および言葉で表現された悲しみであった。【結論】以上の所見から、抑うつ症状および失感情症とともに、強迫行為および受け入れがたい思考の症状軸が自殺傾向に寄与することが示唆された。したがって、OCD患者においてこれらの症状を慎重に観察すべきである。